不安と集団間バイアス：テロ管理か連合心理学か？C. David Navarrete, Robert Kurzban and Daniel M. T. Fessler University of California, Los Angeles Lee A. Kirkpatrick College of William and Mary死の熟考は、イングループイデオロギーへの支持を高める。この結果は、テロ管理理論（TMT）の支持者によって実存的不安を緩和しようとする試みとして説明されている。 TMTは死を連想させる刺激のみがそのような効果をもたらすと主張するが、進化的な観点からは、祖先の環境において、社会的支援を集めることが確実に適応的な反応であるような問題を提起する様々な状況に対して、集団間バイアスの増加が起こる可能性が示唆される。2つの文化圏で行われた4つの実験では、この後者の視点と一致する結果が得られたが、TMTとは逆の結果であった。研究1と2は、UCLAの学部生を対象に、死とは無関係の回避的シナリオを考えるよう求められた参加者が、集団イデオロギーを支持する傾向が強まることを実証した。研究3と4では、これらの結果を再現し、コスタリカの2つのサンプルにおいて、自尊心と集団主義が集団間偏向に及ぼすモデレーティング効果を調べた。これらの結果は、死が顕著でない場合でも、世界観防衛効果が生じることを示している。 キーワード 権威主義、進化心理学、イデオロギー、イングループ、相互依存、アウトグループ、自尊心、テロマネジメント T ERRORmanagement theory (TMT; Green- berg, Pyszczynski, & Solomon, 1986; Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997) は人々が深く抱いた信念やイデオロギーを守るよく知られた傾向（例: Festinger, 1957; Lerner, 1980）を説明しようと努めるものである。 TMTは、様々な影響（Freud, 1929/1984; Kierkegaard, 1844/1959; Rank, 1936）を受けているが、人類学者Ernst Beckerが、なぜ人々が民族中心的な現実の解釈を持っているか、なぜ彼らがそれを信じる必要があるかを説明しようと統合的に努力したことに大きく影響されたものである。ベッカー(1962, 1973)は、人間特有の象徴的な能力について提唱した。David Navarrete, Department of Psychology, 1285 Franz Hall, Box 951563, University of California, Los Angeles, CA 90095, USA [email: cdn@ucla.edu]Group Processes & Intergroup Relations 2004 Vol 7(4) 370-397 自己反省的思考は、物理・社会環境の多様性の中で生存・発展する能力を高めるので適応的であった。しかし、これらの能力は、人間の努力の必然的な結果が死であることを認識するようになり、麻痺した不安の可能性をも生じさせるようになった。ベッカーによれば、自己保存を志向する生物にとって死が不可避であることを知ることは、衰弱した不安の慢性的な状態を生み出す可能性があり、それは我々の種が克服しなければならない適応的問題であったという。 ベッカーに続いて、テロ管理論者は、文化的世界観の重要な機能は死の恐怖を管理することであると主張する。世界観は、来るべき生を約束するという意味で現実的または象徴的な不滅の感覚を提供すると考えられ、また、個人よりも大きく、個人の死後も存続する意味と安定性のシステムを提供するという意味で象徴的であると考えられるからである。この見解によれば、エスノセントリズムは、アウトグループのイデオロギーに対する防衛反応によって引き起こされる部分が大きい。 異質な他者が既成のイングループとは異なる価値観や信念を持っていることを知るだけで、個人の文化的に構築された世界観の正当性が問われ、死の不安にさらされるのである。TMTの理論家は、この不安のために、自分の世界観への信頼を強めることによって、この不安から自分を守ろうとするのだと主張する。これは、自分の中核的な信念を補強し、アウトグループを軽蔑し、極端な場合には、自分と同じ考えを持たない人を攻撃したり、消滅させたりすることによって行われる（McGregorら、1998年）。 TMTの提唱者は、個人の世界観が死の懸念から身を守ってくれるから、自分の肉体的な死の見通しを思い起こさせることは、この文化的緩衝材の必要性を高めるはずだと主張している（Greenberg et al.） TMTの研究者は、自分の死について考える実験において、自分の考え方や価値観に近い人に対する肯定的評価が増加し、自分と異なる考え方をする他者を軽蔑することを明らかにしている。このような変化は、死の恐怖から自分を守るために、自分の文化的世界観を守ろうとする試みであると、TMT理論家は主張している。死生観誘導は、アウトグループのメンバー（Harmon-Jones, Greenberg, Solomon, & Simon, 1996）、道徳的違反者、態度的に異質な他者に対する評価を厳しくすることが示されている（Greenberg et al.） 同様に、死亡率顕著性誘導は、イングループイデオロギーを強化する人々に対する肯定的な評価バイアス（レビューはGreenberg et al.1997参照）と、道徳的基準を守る人々（Rosenblatt et al.1989）または態度的に類似する人々（Greenberg et al.1990）をより肯定的に評価することが実証的に引き出されている。 恐怖管理の提唱者は、これらの「死亡率-サリエンス効果」は一般的な価値観へのアクセス、否定的感情、心配な思考から生じる効果として説明できないと主張し（Greenberg et al.、1995）、彼らの実験結果は死の懸念の顕著性によって特別に引き起こされると明確に主張している（Arndt, Greenberg, Solomon, Pyszczynski, & Simon、1997; Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Simon, & Breus, 1994）。最近の論文では、死亡率顕著性研究を再検討した後、TMTの主要な立役者3人が、上記の研究で得られた[TMT]のユニークな支持は、死亡率顕著性効果が、不安を誘発したり自己を脅かす出来事に反応するのではなく、自分自身の死亡率に関する懸念によって特別に生み出されるという前提に基づくと明瞭に述べています。現在では、死亡率顕著性効果は実際に死亡に関する考えによってのみ引き起こされるという非常に強力な事例を作ることができると我々は考えている。(TMTの理論的難点 TMTは印象的な一連の研究をもたらし、詳細な予測は慎重な実験作業によって裏付けられたが、この枠組みにはいくつかの理論的難点がある。TMTに対する異論は、すでに他の著者からも出されているが（Buss, 1997; Leary & Schreindorfer, 1997など）、TMTの理論家からは満足のいく回答は得られていない。これらのうち主なものは、（1）Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 371 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 371 この理論の基礎となる「生存本能」の仮説の問題性、（2）不安軽減の適応機能という考えである。 TMT支持者は、「生存本能」、すなわち、すべての生物に自らの死を回避させると称する動機付けシステムに言及している（Greenbergら、1997）。しかし、このような主張には論理的・理論的な根拠がある。第一に、死を回避する一般化された本能は、危険を回避しなかった場合の最終的な結果を予見する何らかの能力を通じてのみ機能しうる（すなわち、「もしこの崖から落ちたら、私の体は回復不能な損傷を受け、結果として私は死ぬ」、など）。つまり、「生存本能」とは、まだ起きていない事象が自分の生命に終止符を打つという認識が必要なのである。これは、自分自身の死を意識しているのと同じである。では、TMTが主張するように、すべての生物は「生存本能」を持っているのに、人間だけが自分の死を予見できるというのはどういうことだろうか。もし「生存本能」を持ち、自分の死を意識することで、麻痺したような不安が生じ、それが世界観の防衛によってのみ解消されるとすれば、すべての生物が世界観の防衛を行っているか、人間だけが「生存本能」を持っているか、つまり自然選択が人間に新しい本能を生み出し、それを持つ者に瞬時に麻痺した不安を発生させたかのどちらかであろう。どちらのシナリオも非常にありえないことである。

より広い理論的観点から見ると、「生存本能」という概念に内在する論理的困難は驚くべきことではない。現代の進化的アプローチは、自然選択は特定の適応的問題を解決するために設計されたメカニズムしか構築できないので、そのような一般的な動機付けシステムはありえないと明確に主張しているからだ（Tooby & Cosmides、1992）。現代の進化心理学にとって重要な領域特異性の論理は、そのようなメカニズムは単に漠然としすぎていて、適応行動を実際に導くことはできないと主張している（Buss, 1991; Pinker, 1997; Symons, 1992）。崖を避けるという問題は、自然淘汰が認知メカニズムを設計して解決できる課題であるが（視覚的崖フェノメノン；Gibson & Walk, 1960）、死を避けることそのものは、そうではない。単一の「生存本能」のように見えるものは、それぞれが近接した手がかりの特定のクラスに反応して不安を生成することによって部分的に特定の種類の危険から生物を保護するように設計された個別のメカニズムのコレクションである可能性が高い（Paulhus & Trapnell、1997年）。 不安が脅威の条件下で活性化される適応の産物であるならば、不安な反応を抑制する追加システムを選択することは強く嫌われるはずである (Buss, 1997; Leary & Schreindorfer, 1997; Pelham, 1997)。線路に座って電車が近づいてくることに不安を感じている人は、自分の世界観について温かい考えを持つことで、いくらか安心するかもしれないが、差し迫った消滅の問題はまだ迫っている。危害や死の予感に対する適応的な反応は、単に不安を軽減するだけでなく、そのような出来事の可能性を低くするような行動を取ることだと予想される。仮に、ある生物が何らかの理由で特定の状況に対して「過剰な」不安反応を示すように設計されたとしても、この過剰な不安を補うために別のシステムを構築するのではなく、情動反応の低減を選択しない理由は不明である。実際、不安は効果的な行動の障害になるというTMTの反推論とは対照的に、感情システムは祖先の人間が直面したと思われる適応的な課題に直面して適切な行動を促すようにうまく設計されていることが、多くの研究によって示されています（Cosmides & Tooby, 2002; Curtis & Biran, 2001; Damasio, 1994; Fiske, 2002; Frank, 2001; Kirkpatrick, Waugh, Valencia, & Webster, 2002）。 世界観防衛の進化論的視点 我々は、死亡率-感覚現象は、社会的ネットワーク、対人愛着、および連合の形成を促進する適応的メカニズムのシステムを参照することによって、よりよく説明できることを提出する。TMTに代わるものを開発するにあたり、我々は、人類学者であるA.I.ハロウェル（1956, 1967）に触発された進化的な観点を採用した。この考え方は、相互主義的な協力関係にある利己的な行為者間の調整の効率性を高めるために、社会規範への適合の適応的有用性を強調する進化的ゲーム理論モデルと一致している（例えば、McElreath、Boyd、Hallowell（1956, 1963）、彼は集団内の個人の適応的調整には文化基準の内部化が重要であると論じた（例えば、Hallowell, 1963,1963）。 McElreath, Boyd, & Richerson, 2003）。規範の内在化が規範遵守の社会的便益のために起こり、そのような便益が必要な時に特に重要であるとすれば、自然選択は、連合的支援によって改善できる緊急事態に直面した時、個人が同盟の維持と形成を強化するために強く規範支持を示すように人間の心理を形成したと期待できるだろう。人間の社会的推論の関係モデルにおける規範の内面化の中心性は、社会的認知の分野における文献のかなりの部分と一致している（Aron, Aron, Tudor, & Nelson, 1991; Baldwin, 1992; Hardin & Higgins 1996; Leary, 2000; Schaller & Conway, 1999）、また、集団間バイアスに対する古典的な社会心理学的アプローチ（Asch, 1952; Sherif, 1966; Sherif, Harvey, White, Hood, & Sherif, 1954）でも一般的なものであった。

人々が対人関係を作り上げたり強化したりする重要な方法の1つは、相互理解と共通の価値観、あるいは関連する他者との共有現実と呼ばれるものを達成したと認識することである（Hardin & Higgins, 1996）。他者と協調し、他者から受け入れられようとする人間として、人々は他者が自分を尊敬し、好きになると信じる方法で自分を提示する傾向がある（Asch, 1955; Baumeister & Leary, 1995; Schaller & Conway, 1999）。もし、個人が関係性の目標に応じて戦略的にコミュニケーションの内容を変更するならば（Hardin & Conley, 2001）、印象管理の動機は、社会的認知や他者の評価査定に影響を及ぼすかもしれない（Schaller & Conway, 1999）。社会的関係を円滑にするために必要な心的表現を生成する適応システムは、脅威的な状況において特に活性化するはずであるため、我々はこのことが必要な時に特にそうであると考える。 社会的葛藤やニーズがあるときには社会的関係が特に重要なので（Baumeister & Leary, 1995; Tooby & Cosmides, 1996）、死に関するものに限らず、特定の種類の回避的刺激にさらされると、自分の参照集団に対する親規範的態度が増加するはずだ（つまり、TMT理論家が世界観防衛と呼ぶ変化）、という理論である。 したがって、TMTでは、死の思考を誘発するような刺激や覚醒がなければ、社会的態度に影響を及ぼす認知状態の前述のような変化をもたらさないことを予測しているが（Arndtら、1997；Greenbergら、1995、1997）、我々は、様々な回避的刺激がこの効果をもたらすと予測している。より具体的には、（1）身近な環境において個人にとって適応的な問題を引き起こし（より正式には、人間の心が進化した環境において繰り返しそうなった）、（2）味方の支援を用いて最も効果的に対処できる、あるいはそうなったであろう状況に関連または指標となるような刺激であると予測している。我々は、死への思いがイデオロギー防衛を高めることを示唆している。それは、先祖代々の環境において、死の原因として一般的と思われるもの（悲惨な病気、深刻な身体的被害、飢餓）が、社会的支援の獲得に成功すれば、重要な健康上の結果をもたらす状況であったためである。

したがって、TMTでは、死の思考を誘発するような刺激や覚醒がなければ、社会的態度に影響を及ぼす認知状態の前述のような変化は生じないと予測されるが（Arndtら、1997；Greenbergら、1995、1997）、我々は、さまざまな回避的刺激がこの効果をもたらすはずであると予測する。より具体的には、（1）身近な環境において個人にとって適応的な問題を引き起こし（より正式には、人間の心が進化した環境において繰り返しそうなった）、（2）味方の支援を用いて最も効果的に対処できる、あるいはそうなったであろう状況に関連または指標となるような刺激であると予測している。我々は、死を考えることがイデオロギー的防衛を高めることを示唆しているが、それはむしろ、祖先の環境における死の原因（悲惨な病気、深刻な身体的被害、飢餓）が、社会的支援の獲得に成功すれば、有意に健康的な結果をもたらす状況であったためであると考える。 TMTの提唱者は、死亡に関する懸念は、より一般的な脅威となる事象の特殊な例ではなく、親規範的感情を増大させる可能性があると主張し（Greenbergら、1994、1995）、死に関連しない回避的思考、たとえば試験に落ちる、人前で話すことを強いられる、などにさらされても、死亡の顕著性が引き起こす「世界観防衛」効果は発生しないことを実証している（Greenbergら、1997）。彼らは、これらの結果を、死亡率顕著性効果Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 373 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 373が「自己関連の脅威が集団間バイアスと文化的価値への忠誠を高めると示唆するかもしれない他の理論の範囲外」であるという考え方を裏付ける証拠と解釈した (Greenberg et al., 1994)。私たちの観点では、上記の非死亡的なプライムは、連合が問題に対する適応的な解決策の一部であると考えられるような、現実と関連した課題を喚起しないので、親規範的な認知の同じシフトを引き起こすことは期待されないはずである。これらの結果は、死生観のユニークさを語るのではなく、我々の心が働くように設計されている祖先の世界に目を向けて現代の経験を見る必要性を強調しているに過ぎない。 なお、我々は、説明すべき現象が、単に人々が内集団の規範を肯定的に評価し、外集団の規範を否定的に評価する傾向からなることを提唱しているのではない。この現象は、より複雑なものであることが示唆されている（Greenberg et al.1990、Mikulincer, Florian, Birnbaum, & Malishkevich, 2002など）。回答者の性格やイデオロギーによっては、死亡率サライエンス条件下で異質な見解の評価がより大きく許容される場合があることはテロマネジメント研究者と同意見である (Greenberg, Simon, Pyszczynski, Solomon, & Chatel, 1992)。しかし、テロマネジメントの研究者は、このような違いは、個人の世界観に合致した実存的ジレンマへの対処の独自のスタイルから生じていると考えている（Greenberg et al.  社会生活を営む上で個人の志向性が重要なのは、社会的関係を円滑にする心理的メカニズムが価値観・信念・規範を共有する言語によって媒介されるため（Hardin & Conley, 2001）、所属する社会集団の規範によって社会関係を整備するための適切な関係認知が異なるからであると考えられる。したがって、自分の所属する集団が多様性に対する寛容性を重視している場合、脅威に対してそのイデオロギーへのコミットメントを強化することは、反対意見に対するあからさまな寛容性を高めることを意味するのである。 本研究では、これらの競合する理論を評価するために、TMT研究で採用されているのと同じ研究パラダイムを用いたが、若干の変更を加えた。死への恐怖操作に加えて、死とは関係ないが社会的扶助の必要性に関連するシナリオを考えさせるプライミング刺激を含む他の条件を設定した。 TMTでは、恐怖管理研究者が用いる従属尺度の変化は、自分の肉体的な死に関する考えが顕著になったときにのみ観察されるべきだと主張する（Greenberg et al.、1997）が、我々の連合心理学理論は、そのような効果をもたらす別のルートとして、社会的関係の必要性を語る死に関連するシナリオを考えることを示唆する。この仮説を検証するために、我々は（1）自分の所有物が脅かされる、（2）社会的孤立や重要な社会的関係からの分離に焦点を当てたプライムを設計した。 盗難体験をプライムとして用いた理由は以下の通りである。祖先の環境では、個人が資源を入手し管理することが適応度の重要な決定要因であったという仮説がある（Manson & Wrangham, 1991）。したがって、ヒトは価値ある資源を積極的に調達し維持するための心理的メカニズムを進化させてきたと考えるのが妥当であろう。社会的ネットワークと連合は、同盟者が資源へのアクセスを増加させ、資源の保護を助け、資源を奪おうとする競争相手に報復を行うことができるため、これらの目標達成に役立つことは明らかである。なぜなら、そのような出来事は、資源の必要性が即座に高まることを示し、これまで自分の資源を保護するための社会的支援が不十分であったことを示し、そして、その必要性を知らせるからである。 33 pm Page 374 盗人に対する復讐のために味方を必要とし、それが将来の富を減少させる違反を抑止することになる。 我々は、実験プライムとして完全な社会的孤立の見通しがあれば、同様に連合支援を強化するメカニズムが引き出されると予期した。個体が社会性から受ける恩恵、例えば交尾相手を見つけること、捕食者や同類生物からの保護、食物やシェルターへのアクセスなどは、社会集団に含まれるかどうかにかかっている。社会的ネットワークや連合がこれらの利益を得るために個人を助ける限り、個人は関連する社会的集団に含まれるための手段を講じるよう動機づけられるはずである。我々は、上記の窃盗-サリエンス素因と同様に、社会的排除や社会的疎外が生じたときに有益な社会的絆を形成または再確認する適応システムのメカニズムが、必要な社会的支援を得るために必要な親ノーマル、イングループ-親愛的感情を生じさせるはずだと仮定している。 我々は、回避的思考プライムが、死生観誘導によるイデオロギー防衛効果の根底にあるものと同じ心理論理メカニズムを活性化することを示したかったので、これらの効果が、テロマネジメント研究で示されたものと同じ社会志向や性格次元の個人差によって調整されることを証明しようとしたのである。研究1では、UCLAの学部生を被験者として、人格構造である右翼的権威主義（Altemeyer, 1998）を用いて、内集団イデオロギー防衛の緩和効果を検討した。研究2では、テロマネジメント研究者が採用している測定法（Arndt et al.1997）を用いて、我々の実験で見出された効果が死に関連する思考の増加によるものではないことを実証しようとした。研究3および4では、研究1の要素を再現しつつ、コスタリカの2つのサンプルにおいて、自尊心と相互関連性が集団間偏見に及ぼす緩和効果を探った。 研究1 最初の研究では、恐怖管理研究者が死生観プライムを用いて作り出すのと同じタイプのイングループ・イデオロギー防衛を引き出すために、死とは無関係の実験的精神状態を用いることを試みた。テロ対策研究でよく用いられる、アメリカ人、イデオロギー、文化に対する偏見という、内集団イデオロギー防衛の依存的な指標を用いた。死と無関係の嫌悪的なテーマへの暴露は、従属尺度に対して、死生観によるものと区別できない効果をもたらすと予測した。 権威主義と政治的保守主義は、恐怖管理実験において、異質な他者に対するバイアスの調整因子であることが示されている（Greenberg et al, 1990, 1992）。 政治的保守主義者と高権威主義者は死を意識した後に異質な他者への好感度が低下するが、政治的リベラル派と低権威主義者ではそのような効果は認められなかった。イデオロギーへの固執が強まれば、非寛容なイデオロギーと寛容なイデオロギーの間で、異質な他者に対する反応が異なるはずであることを考えれば、このパターンは理解できる。 そこで、私たちは、回避的思考プライムが死亡率サリエンスと同じメカニズムで作用することを示すために、各プライムについて、権威主義と親米バイアスの関係を示す傾きが実験条件の関数として増加し、態度変化が権威主義の個人差によって調節されることを予測した。 より具体的には、親米バイアスに対する治療の効果は、主に権威主義が高得点の参加者に見られると予測された。 恐怖管理の研究者は、死亡プライムと世界観防衛の測定との間に遅延・錯乱を設けることが死亡-サリエンス効果の発現に必要であると報告している（Arndtら、1997）。 同様に、恐怖管理の研究者は、死亡-サリエンス・プライムの後に自己報告された感情には測定可能な差がないことを発見した。このパターンは、抑圧と不安Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 375 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 375 managementのプロセスという観点から解釈されている（Greenberg et al.、1997）。このような理論的主張には反対であるが、死と関連しない回避的思考プリムは、死生観によって誘発されるものと同じメカニズムを活性化するはずだと我々は予測するので、我々の盗難プリムと社会的孤立プリムを用いてこの空効果を再現しようとした。そこで、実験操作と親アメリカンバイアスの測定の間に、Positive and Negative Affect Schedule, Expanded Form (PANAS-X; Watson & Clark, 1992) を実施し、遅延と気晴らしとして、実験操作が依存尺度の結果に影響を与えそうな情動の測定可能な変化を引き起こしたかどうかを検証することになった。 テロマネジメントの研究では、調査した人口統計学的変数に関して一貫した有意な効果を見出すことができなかったが（Greenberg et al.、1997）、我々は、性別、年齢、大学在籍年という人口統計学的変数のグループ間バイアスへの効果も調査した。 我々は、有意な効果の結果について先験的な予測はしていなかったが、観察された効果に過度のノイズがないことを確認しながら、これらの変数の効果を探ろうと考えたのである。 参加者Greenberg, Arnat, Schimel, Pyszcznski, & Solomon (2001)に従い、アメリカ国籍を持ち、事前調査のアンケートで「アメリカ人としてのアイデンティティはあなたにとってどれくらい重要か」という項目に9段階評価で5以上と答えた参加者のみを本研究に採用しました。これは、米国を関連するイングループとして見ていない人を排除することによって、親米的バイアスの従属測定の有効性を高めるために行われたものである。参加者は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の学部生である。学生は4ドルを支払い、人格と社会的態度を調査する匿名調査として提示された質問票のパケットを受け取り、自発的に参加した。アンケートの全項目に回答できなかったため、分析前に5人の参加者を削除した後、18歳から34歳までの女性73人、男性36人（平均年齢＝20.4歳）が残った。 1手順参加者は、質問票を自分のペースで記入するよう指示され、質問票の提示順に従って記入するよう注意された。 その指示に従い、参加者は4つのプライミング条件（死亡恐怖、盗難恐怖、社会的孤立恐怖、コントロール）のいずれかに無作為に割り当てられた。操作の前に、参加者は1997年の右翼権威主義尺度（RWA、30項目のフルスケール；Altemeyer, 1998）と愛国心尺度（Pratto, Sidanius, Stallworth, & Malle, 1994）に回答している。これらの測定に続いて、参加者は、各条件のプライムを構成する4つの自由形式の質問票のうちの1つを記入するように割り当てられた。 死生観は、恐怖管理研究でよく用いられる質問紙を用いて操作された（Greenberg et al.1990など）。参加者は、自分の肉体の死を考えることで生じる感情と、肉体が死んだらどうなるかを記述するよう求められた。盗難-サリエンス条件では、同様の調査を行ったが、参加者には、帰宅して自分の家に泥棒が入ったことを知ったときの感情を記述し、この現実に直面したときの自分の身体状態を記述するよう求めた。社会的孤立-サリエンス条件では、家族や友人から完全に孤立した自分を想像し、物理的に一人になったときに何が起こるかを記述するよう求めた。対照条件では、TMTの研究と同様に、好きなテレビ番組を見ているときの自分の感情や身体の状態を想像してもらった。 操作後、参加者は状態PANAS-X（Watson & Clark, 1992）を記入し、その後、テロマネジメント研究者（Greenberg et al, 2001）が用いた方法に従って、2人の留学生が書いたと思われる2つの短いエッセイを読んだ。一方のエッセイでは、アメリカとその国民に批判的な個人の体験と意見が述べられており、もう一方では、アメリカとアメリカの価値観を称賛するような感情が表現されていた。 各小論文の後には、対象著者に対する参加者の主観的評価を測定するために、InterpersonalGroup Processes & Intergroup Relations 7(4) 376 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 376 Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 377Judgment Scale (IJS;Byrne, 1971)を実施した。この尺度は、対象著者の好感度、知性、知識、道徳性、精神的適応度、真実性、被験者がその著者と実験に取り組みたいと思う程度についての被験者の評価を測定するものである。エッセイと評価は、発表の順番にカウンターバランスが取られていた。 アンケート用紙はいくつかの人口統計学的項目で締めくくられ、その後、参加者はアンケート用紙を大きなマニラ封筒に入れ、リサーチ・アシスタントに届けるよう指示された。最後に、参加者はデブリーフィングを受け、感謝され、参加費を支払われた。 結果および考察 実験的治療群の効果が、操作による気分の変化によって媒介されるかどうかを評価するために、プライムによって喚起されやすい感情の種類（恐怖、抑うつ、敵意、全般的陰性感情）を測定するPANAS-Xの下位尺度で多変量回帰分析を実施した。このことは、プライムが意識的な気分に有意な影響を及ぼさないことを示唆している。 集団間バイアスに対する回避的思考プリムの効果を検討するため、条件（コントロール、死、盗難、社会的孤立）の一元配置ANOVAを実施し、プロアメリカンバイアスを調べた。 その結果、条件によって有意な効果が認められた（F(3, 105) = 2.48, p= .07）。各実験条件とコントロールの予測値の計画比較では、死亡-サリエンス条件（F(1, 105) = 5.43, p< .05）と盗難-サリエンス条件（F(1, 105) = 4.39, p< .05）で親米バイアスが有意に増加し、社会隔離-サリエンス条件（F<1）には増加しなかった。 しかし、実験条件間の差は有意ではなかった（F(2, 105) = 1.54, p= .22）。表1は、この分析に関連する平均値と標準偏差を示したものである。 親アメリカン・バイアスに対する人格変数と人口統計学変数の媒介主効果および媒介相互作用効果を評価するために、2段階の階層的回帰分析を行った。第一段階では、親米的偏向の予測因子として、実験条件（死、盗難、孤立）、性格共変量（愛国心、RWA）、デモグラフィック変数（性別、年齢、大学在学年）の主効果を評価した。第二段階では、それらの交互作用を評価した。(1)治療条件と対照群の傾きを比較するため、(2)権威主義のレベルが高くても低くても、それぞれの実験条件の単純効果を推定しやすくするため、人格変数を交互作用項として含めた (MacCallum, Zhang, Preacher, & Rucker, 2002) [0]. 各実験条件は二項変数で表し、性格変数の権威主義と愛国心は連続値で、人口統計変数の性別と民族は二項変数で、年齢と在学年は連続値で入力した。 連続変数はゼロ中心、二項変数はダミーコード化した。 表1.条件別親米バイアスの平均値と標準偏差（研究1） 実験条件 親米死亡率 盗難社会的孤立バイアス 制御的サリエンス サリエンス 平均値0. 86 1.67 1.57 1.12 SD1.16 1.55 1.25 1.00 N26 25 28 30 注：親米バイアス得点は-1.33 から 4.83 であり、得点が高いほど親米バイアスが大きいことを表している。

06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 377 分析の前に（Aiken & West, 1991）、変量が入力された。変数が後方包含ステップワイズ回帰プロセス（Hamilton, 1998, pp.154-157に記載）を用いてモデルに入力された。すべての適格な予測変数がモデルに含まれるとき，それが説明される分散を有意に増加させた場合（/H9252< .05），その項はモデルによって保持された． 回帰の最初のステップでは、性格と人口統計学の項が、経験的精神状態と権威主義の項からなる基本モデルに入力された。 回帰の第1段階では、条件に対してわずかに有意な効果が認められた（F(3, 103) = 2.45, p= 0.07）。愛国心は親米的偏見と正の相関を示した（F(1, 103) = 14.07, p< .001, /H9252= .36）。権威主義の主効果は有意でなかった（F< 1）。 3 死亡説、社会的孤立説、盗難説の実験条件間で有意な差は見られなかった。 第二段階として、性格および人口統計学的予測因子と条件との交互作用が評価された。性格および人口統計学的予測因子と実験条件との交互作用は、変数の積を使用して作成された。デモグラフィック変数と性格変数と条件との交互作用は、上述のステップワイズプロセスと同様の方法で探索された。実験条件、権威主義、愛国心からなる基本モデルに、各共変量と条件との間の相互作用のブロックを追加した。交互作用と主効果は、モデルによって説明される固有分散に有意に寄与している場合に保持された。 第2段階の回帰では、愛国心に主効果があり（F(1, 100) = 14.67, p< .001）、権威主義と実験条件の交互作用はわずかに有意であった（F (4, 100) = 2.04, p= .09）。 4 予測どおり、権威主義の関数として親米バイアスの増加を測定した実験条件の傾きは、対照の傾きと有意に異なり（F(1, 100) = 7.53, p<.01）、実験条件間の有意な差はなかった（F< 1）。これらの変数を制御し、RWAの大平均値で単純主効果を評価したところ、条件による効果が認められ（F(3, 100) = 2.74, p<.05）、実験条件による違いは認められなかった（F(2, 100) = 2.11, p= 0.13）。 有意な相互作用の原因が主に権威主義の高得点者にあることを確認し、親米バイアスは権威主義の高得点者のみに見られ、低得点者には見られないという我々の特別な予測を検証するために、権威主義の高・低レベルで条件の単純効果を評価した。RWAが高位（平均より1S.D.）で評価された実験条件の単純効果は、対照条件より有意に高く（F(1, 100) = 11.51, p< .001）、実験条件間の差異は認められなかった（F(2, 100) = 1.38, p=.26). 各実験条件の単純効果はコントロールより有意に高かったが、RWAの低レベル（平均より1S.D.下）で評価した単純効果はコントロールと有意な差はなかった（F<1）。この分析に関連する実験条件（コントロールとの比較）の効果量を図1に示す。 テロマネジメント研究者は、高権威主義者や政治的保守主義者の世界観はイデオロギーの異質性に対する寛容さを重視しないため、そのような人々はイングループのイデオロギーに対してより好意的で異質な見解に対して嫌悪感を示すことによって自分の世界観を強化できると仮定する（Green- berg et al, 1990, 1992）。逆に、低権威主義者や政治的リベラリストの世界観は、イデオロギー的異質性に対する寛容性と評価である。したがって、そのような人々は、異質な意見に対してより大きな寛容性を示すことによって、自分の世界観を強化することが期待できるはずである。 このような予測に同意しつつも、寛容性の違いが重要なのは、個人の世界観を強化することによって死の不安を和らげるからではなく、むしろ、異質な他者に対する寛容性が、個人が関連する集団にとって重要だと考えるタイプの思想によって調節されるからだと提案する。 高権威主義者は文化的多様性に対する不寛容を主張する集団に同調し、低権威主義者はその逆を主張する集団に同調する。観察されたGroup Processes & Intergroup Relations 7(4) 378 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 378 Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 379pattern (i.e..) このことは、社会的同盟が特に重要であるような脅威的状況に直面したとき、個人はその規範をあからさまに体現することによって、所属する集団の基準に適合していることを誇示するという我々の仮説と一致している。 このような効果は、私たちの予測通りであり、TMTの主張とは異なり、死に関連する脅威に限定されない。 研究2 研究1において、我々は、集団間イデオロギーバイアスを生じさせるための、恐怖に関連した回避的思考プリムの有効性を実証した。 しかし、これらの結果は、決して死にのみ焦点を当てているわけではないメカニズムの働きを反映していると主張するので、我々は、我々の回避的思考プライムが焦点意識の外で死に関連した思考を微妙に引き起こしていないことを確認したいと考えた。 そこで、研究1で発見された効果が、強盗や孤立のプライムが死の懸念を参加者に微妙に誘発したために生じた可能性を評価するために、TMT研究でよく用いられる操作チェックを採用し、死亡率サリアンスの誘導後に死の懸念の顕著さを計測した。 参加者は、恐怖管理研究者によれば、意識の片隅にある死に関連する思考へのアクセス性を測定する単語完成課題を与えられる（Arndt et al.、1997）。通常、参加者は死生観条件と対照条件に割り当てられ、その後、単語完成課題を遂行する。分析では、完了した死語の平均数を細胞間で比較する（すなわち、MS対コントロール）。 我々のデザインはこの形式に従っているが、研究1で説明したものと同じ治療条件（死とは無関係）を含んでいる。 また、研究1の結果やTMT研究の結果に適用できる解釈、すなわち、権威主義と実験条件の関数としての親米バイアスの標準化単純効果を除外しようとした。記号は、権威主義のレベルが高い場合と低い場合（平均値の上下1S.D.）で、同レベルの対照条件と比較して、実験操作後に親米バイアスが増加・減少したことを示す。P値は、コントロールに対する計画的な比較を反映したものである。 低 (-1 S.D.) 高 (+1 S.D.) 権威主義 死亡率 盗難 隔離 1.5 1.0 0.5 0 - .5 親米バイアス N.S /K2A/K2A/K2A /K2Ap < .05 /K2A/K2A p < .01 /K2A/K2A/K2Ap < .05 /K2A/K2A p < .01 /K2A/K2A/K2Ap < . 01 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 379 権威主義的人格の発達に重要な役割を果たす（Adorno, Frenkel- Brunswick, Levinson, & Sanford, 1950）ことが、死生観誘導後の防衛反応において権威主義の低い人と高い人との間で見られる著しい違いの根本にある (Greenberg et al…, 1990). そこで、研究1で用いた右翼権威主義（Altemeyer, 1998）と同じ尺度を用いて、権威主義が死の懸念に及ぼす影響と、それが回避的思考操作と相互作用して死の思考への接近を増加させる可能性を検討した。 参加者カリフォルニア大学ロサンゼルス校の人類学コースに在籍する学部生を対象とした。 学生は4ドルを支払い、性格や社会的態度について調査する匿名アンケートとして提示されたアンケート一式に自発的に参加した。アンケートの全項目に回答しなかった4名を分析から除外し、100名（女性69名、男性31名、年齢18歳から30歳、平均20.5歳、平均大学在学年数2.6歳）の参加者を得ました。多変量回帰分析の結果、これらの人口統計学的変数に条件間の有意な差は見られなかった。 手順参加者は、対照群と回避思考処理群に割り当てられた。 手順とセルの割り当ては、研究1で説明したものに従った。参加者は、RWA尺度（Altemeyer, 1998）を記入し、その後、研究1に記載されたそれぞれの操作を行った。参加者は、PANAS-X（Watson & Clark, 1992）を実施した後、死に関連する単語、または中立的な単語で25単語中6単語を完成させるという、死の思考アクセス性の測定として設計された単語語幹完成課題を実施した（Arndt et al.） 死に関連する単語は、‘buried’, ‘grave’, ‘killed’, ‘skull’, ’cofﬁn’であった。パケットはいくつかの人口統計学的項目で終わり、その後、参加者はパケットを大きなマニラ封筒に封をしてリサーチ・アシスタントに届けるように指示された。結果と考察 死に関する思考アクセス性は、単語完成課題において死に関連する単語をいくつ完成させたかによって操作された。死への思考アクセスに対する回避的思考プライムの効果を評価し、人口統計学的および人格的尺度の効果を調べるために、研究1で述べたのと同じ統計手法を採用した。 死への思考アクセスに対する条件の効果を評価する一元配置分散分析では、条件による有意な主効果は認められなかった (F(3, 96) = 1.99, p = .12)。しかし、死生観条件のみが死生観へのアクセスを増加させ、盗難や孤立観条件は増加させないという我々の予測を計画的に比較したところ、支持された。死亡-サリエンス条件では死亡思考が増加したが（F(1, 96) = 5.26, p< .05）、盗難（F< 1）および社会的孤立-サリエンス条件では有意な増加は認められなかった（F(1, 96) = 1.11, p = 0.30）。実験条件間の差は認められなかった（F(2, 96) = 1.48, p= .23；表2）。 人格変数と人口統計学的変数の媒介・調整効果を調べるために、研究1で述べたのと同様の階層的回帰過程を採用した。 実験条件を含むモデルに、人口統計学的変数と人格変数を追加した。回帰の第一段階で入力された変数（RWAを含む）は、モデルによって説明される分散に寄与しないため、基本モデルは変更されないままであった。 回帰分析の結果、性別による交互作用と実験条件による主効果は有意であり（F(3, 92) = 5.48, p<.01） 、条件間の有意差（F(2, 92) = 7.86, p<.01） を示した。RWA-条件相互作用は、死への思考アクセス性に有意な効果を示さなかったため、モデルから削除した。人口統計学的変数と性格変数のうち、性別-操作の相互作用ブロックは、有意な予測因子として保持された（F（4、92）=4.49、p<0.01）。 不安と集団間バイアス 381盗難-サリエンス条件では、対照群と比較して、男性は女性よりも低い死亡思考アクセス性を示したが、隔離と道徳-サリエンスの性差は対照群と比較して有意差はなかった（F< 1）。 その結果、死生観と窃盗の間には有意差があったが（F = 12.48, p < 0.001）、窃盗と等位性サリエンスの間には差がなく（F < 1）、この二つの条件における性差はほぼ同じであることが示唆された。予測通り、これらの性差を制御した上で主効果を評価したところ、死亡-サリエンス条件では対照条件（対照平均＝1.64、SE＝0.16）と比較して死亡思考アクセス性が有意に増加したが（B = 0.67, SE= 0.24, p< 0.01, /H9252= 0.70) 盗難、社会的孤立-サリエンス条件ではこの増加は見られなかった (F(1,92) = 2.21, p= .14, F< 1, respectively) 。計画比較の結果、死生観と窃盗のサリエンス条件では死生観へのアクセスに有意差があり（F(1, 92) = 12.33, p < .001）、死生観と社会的隔離のサリエンス条件でも有意差があった（F(1, 92) = 3.92, p < .05; Figure 2）。この結果は、研究1における窃盗と社会的隔離のプライムによって誘発されたイングループバイアスが、死にのみ焦点を当てたメカニズムの間接的活性化によって説明できる可能性を排除するものである。 また、高権利者が自分の身体的な死を思い知らされた後に、なぜこれほど強くイングループイデオロギーを強化しようと反応するのか、その代替説明の可能性も排除することができた。したがって、権威主義的人格の発達に重要な役割を果たすとされる、死に関連する関心事への偏執（Adorno et al.、1950）が、死生観誘導後の防衛反応における低・高権威主義者の間に見られる著しい違いに関係しているとは考えられない（Greenberg et al.） 実際、我々のデータは、少なくとも無意識レベル（単語-語幹結合課題が死への思考アクセス性を測定するとされるレベル）では、権威主義と死への不安に対する脆弱性との間に関係がないことを示している。このことは、高権威主義者の英雄論理的志向が、彼らのイングループ・イデオロギー防衛を顕著にしていることを示唆している。このように、研究1における高権威主義者の顕著な集団間バイアスは、社会的関係を整備するために適切な関係認知が、自分が同一視する社会集団の規範によって異なるという我々の主張と整合的であり続ける。 研究3、4の概要 大学生を対象とした多くの研究と同様に、我々の最初の調査の結果の一般化可能性は、対象者の限定された性質によって制限されている。もし、連合心理学が正しいとすれば、この効果は北米の大学生だけでなく、信念や人生経験が大きく異なる参加者間でも現れるはずである。表2.条件別単語語幹完成課題における死に関する単語の完成数（研究2） 実験条件 Death-thoughtMortality Theft Social isolation AccessibilityControl salience salience Mean1.64 2.21 1.66 1.92 SD.91 .91 1.30 1.09 N25 25 24 26 Note: Death-thought accessibility scoreは0から4まであり、得点が高いほど死に関連した思考に接近できることを反映している。 しかし、このような研究は、小規模な社会で、一元的な教育を受けておらず、死や個人の自律性に関する文化的価値観が異なる参加者を用いて行うものである。 さらに、文化的情報を獲得し利用する能力は、我々の種の歴史を通じて、フィットネスの中核的な決定要因であったと考えているので（Boyd & Richerson, 1985, 1992）、進化した連合心理学の仮説は、地域の文化文脈に敏感に反応し、異なる形で作用するはずだと推測される。このような情報がシステムの働きにどのような影響を与えるかを調べるために、自己と他者の区別における文化的差異が回避的思考の民族中心的効果に与えるかもしれない影響を検討したいと考えた。 相互依存 異文化研究の大きなテーマとして、個人主義と集団主義という考え方がある。 この概念の研究は、個人の思考、行動、態度を形成する上で文化的差異が重要であることを示すための努力として始まりました（Triandis, 1972）。それ以来、個人主義／集団主義の区別は、文化を最も基本的に理解するための主要な分析ポイントとして一部の研究者によって賞賛されており、文化的多様性の最も特徴的な次元のひとつと言われています（Fiske, Kitayama, Markus, & Nisbett, 1997）。個人主義とは、独立、自立、個人の権利、自己実現などの価値観を重視する文化的エートスを示すものである。逆に、集団主義は、相互依存、義務、社会規範への適合など、社会中心的な価値観に焦点を当てる。個人は個人主義的な視点と集団主義的な視点の両方を持ち、状況に応じてそれらを活性化させ、どの社会においてもすべての個人は両方の要素を含む個人的な関係を持っている。しかし、集団主義的な感情の平均レベルには、文化によってパターン化された違いがあることが一貫して認められている（Oyserman, Coon, Figure 2. 操作後の死の思考へのアクセス性。平均値は、反応の性差を制御した効果を反映している。効果は標準化された単位で示される。 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 382 Kemmelmeier, 2002). 集団内では、どちらかの極に向かう一般的な志向性の個人差は、「同心円主義」と「バカ中心主義」と呼ばれる性格次元に反映される（Triandis、Leung、Villareal、& Clack、1985）。このパラダイムでは、アロセントリックは自己を感情的・社会的に他者と相互依存していると考え、個人の成功にはあまり関心がなく、関係やイングループの成功により関心がある（Suh, Diener, Oishi, & Triandis, 1998）。 ラテンアメリカの農村文化は、個人の思考プロセスを個人主義/集団主義に沿った社会中心的な方向へ形成すると考えられている。一般に、ラテンアメリカ人は北米人に比べ、家族や地域社会への愛着が強く、他者との感情的な相互依存が強いとされている（Avendano Sandoval & Dias Guerrero, 1992; Triandis, 1993; Triandis, Marin, Lisansky, & Betancourt, 1984）。特に、中米は最も強い集団主義的な意識と相互依存的な自意識を持つ社会であることが示されている。Hofstede (1991)はコスタリカ、パナマ、グアテマラが52の文化の中で最も集団主義的であることを発見しました。 コスタリカの農村 コスタリカは人口400万人弱の中央アメリカの小国で、その約3分の1が農村地域に住んでいる。 現在も農業が盛んな国ですが、ラテンアメリカの中では比較的高い生活水準と識字率を誇っています6。 6 ほとんどの国民が何らかの正規の教育を受けており、12歳までが義務教育で、小学校卒業者の約25％が中等教育機関へ進学しています。伝統的に、政治的な争いの多い発展途上国に住む多くのラテンアメリカ人と同様に、コスタリカ人は国全体よりも自分たちの地域に帰属すると言われていました（Jones, 1935）。しかし、1948年以降、コスタリカは中央アメリカの中でも例外的に政治紛争や暴力がない国になっています。コスタリカ人はこの事実を非常に誇りに思っており、（おそらく国家の安定性のために）強い親国家主義的な傾向を示し、自国が騒がしい地域の中で正気と善の明確な道標であると信じていると報告されている（Beisanz, Beisanz, & Beisanz, 1999; Meléndez, 1991）。 これらの研究では、死への不安が公然と語られ7、社会的孤立のような恐怖が過認識され（レヴィ、1973）、文化的に特に忌避されるよう精緻化された文化的環境における不安源としての死の中心性を探ろうとした。 さらに、我々は、調査票の概念を理解できるほど読み書きができるが、人々が一元的な環境の均質化の影響にさらされていない集団を探した。 8 最後に、我々は、強いナショナリストとしてのアイデンティティを持ち、自己のアイデンティティの一部を国民国家の集団メンバーとして導き出す参加者を対象に研究を行いたいと考えた。これらの理由から、コスタリカの農村は、我々の連合心理学の関係性理論の一般性を検証するのに最適な環境であり、非類似の他者に対する民族中心的評価の文化間差と、この現象の個人の人格的相関を探求することができたのである。 自尊心 自尊心はTMTにおいて重要な役割を果たす。自尊心の高い人は、低い人に比べて、死の恐怖に対する反応がはるかに少ないことが研究者によって示されている（Harmon-Jonesら、1997）。TMTの支持者は、自尊心の高さが死の恐怖に対する強力な緩衝材（すなわち、自分の世界観の基準を満たしているため、避けられない死を知っても平然と生きることができる）を持っていることを指標としているため、このようなことが起こると主張しているが、自尊心に関する新しい視点からは、このパターンは、自尊心と困ったときの協力的支援の可能性の関係でより適切に説明できることが指摘されている。Leary, Tambor, Terdal, and Downs (1995) は、自尊心をソシオメーター、つまり、社会集団の中心であるか周辺であるかの度合いを自己表現するものとして説明している。リアリー（Leary）と同僚たちは、集団に含まれることの機能的意義Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 383 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 383に注目し、自尊心の快楽的側面が集団による受け入れを高める行動の動機づけに役立つと論じている。また、Fessler（2001）は、恥や誇りの感情は、文化的な行動基準や社会的支配の問題に関して、失敗や成功の事例を示すものであり、自尊心は、恥や誇りを引き起こす出来事の履歴を合計することによって、集団における自分の現在の地位を示すものであると論じている。最後に、KirkpatrickとEllis（2001）は、機能的に異なる多数の自尊心ソシオメーターが存在し、それぞれが与えられた社会的な領域でどれだけうまく機能しているかを指標化していると主張している。したがって、グローバルな自尊心は、様々な社会的領域でのパフォーマンスがその重要な決定要因を構成しており、自分の優越性の見込みを集計していると見なすことができる。これらの研究者が示唆するように、自尊心は、人がフィットネスの課題にどの程度対応できるかを示す指標であり、その対応力が社会的統合の程度によって重要な意味を持つとすれば、自尊心の高い人は、自尊心の低い人よりも脅威の状況に直面しても味方を探す努力をしないはずであり、前者は必要に応じてより確実に他者にサポートを頼れるからである。このことから、TMTの研究者が発見したように、死に関連するプライムは自尊心の低い人ほど集団間バイアスを増強する効果が大きいはずだと予測された。しかし、TMTとは対照的に、死を想起させない脅威プリムでも同じことが言えるはずだとも予測した。 研究3では、文化的に異なる第二の集団において、死生観によって生じる思想防衛効果の根底にあるものと同様の心理メカニズムが、死生観はないが適性に関連するプライムによって生じること、そしてこれらの効果が、テロマネジメント研究で示されたものと同じ社会的志向や性格の個人差（権威主義や自尊心）によって調節されることを証明しようとした。研究4では、コスタリカの別のサンプルにおいて、我々の代替的な回避思考プライムの有効性を再現することを試みた。同時に、社会的相互関連性の文化的精緻化が、汎人類連合心理学といかに相互関連しうるかというテーマも取り上げた。個人主義／集団主義を集団間バイアスの主要な調整因子として提唱している理論家たちの洞察に触発され（Fishbein et al.2001、Triandis & Traﬁmow, 2001）、この構成がイングループイデオロギー防衛に及ぼす影響を調べた。 研究3 我々の予測は研究1と同様であった。死と無関係な嫌悪的テーマに曝露された後の集団間バイアスの増大は、死生観によるものと区別がつかないと事前に予測されたのである。これらの効果は、権威主義と自尊心によって調整されると予測され、権威主義では操作との正の相互作用が、自尊心では負の相互作用が予測された（すなわち、自尊心の低い人と権威主義の高い人ではより強い思想的防衛が予測される）。今回も人口統計学的変数については予測せず、集団間バイアスの潜在的な媒介者あるいは調整者としての効果を探った。 方法 参加者コスタリカ人（女性35名、男性40名、年齢17-62歳、M=27.8、学歴0-16歳、最頻値=6）であった。農村地域に住むコスタリカ国民（女性35名、男性40名、年齢17～62歳、M=27.8、学歴0～16歳、最頻値=6）である。 9 参加者は、太平洋沿岸のケポス港（人口約7,000人）から約20km内陸のパーム油プランテーション地域の小さな町セロス（人口約1400人）、およびカリブ海側のバナナ輸出の町カリアリ（人口約4000人）を囲む一連の集落プリマベーラで募集されました。参加者は、公園やバス停などの公共の場で募集し、性格や社会的態度に関する調査に参加した。 参加者の識字レベルに大きなばらつきがあったため、調査はaGroup Processes & Intergroup Relations 7(4) 384 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 384 Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 385structured interview format (Bernard, 1995)で実施された。 すべてのインタビューは、コスタリカ人のリサーチアシスタント2名により、検証する仮説を伏せた上で、非公式のスペイン語で行われた。 手順質問票の全項目を音読し、参加者に各項目について賛成か反対かを尋ねた。そして、参加者の最初の答えによって、完全に同意するか、わずかに同意しないか、完全に同意するか、わずかに同意しないかを尋ね、同意または不同意の度合いを測定した。回答は、4点の強制選択式スケール（1＝完全に同意しない、2＝少し同意しない、3＝少し同意する、4＝完全に同意する）でコード化された。 インタビューは、凝縮されたRWA尺度（Altemeyer, 1998）のスペイン語訳から始まり、次に愛国心尺度が行われた。その後、研究1および2で使用したプライムの翻訳からなる操作を行ったが、対照条件の参加者はプライムを用いなかった。操作の後、Rosenberg Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1965)が実施された。操作と主要な従属測定の間にさらなる遅延を与えるために、自尊心質問票に2つの追加項目が加えられた。次に参加者は、他の中米諸国からの移民が書いたとされる、著者のコスタリカでの経験について書かれた2つの興味深いエッセイを読まされた。エッセイの内容は、研究1やTMT研究で用いられたエッセイとほぼ同じであった（すなわち、一方はコスタリカを支持する感情、他方はコスタリカとその国民を批判する感情）。それぞれのエッセイの後、参加者はInterpersonal Judgment Scale (IJS; Byrne, 1971)にヒントを得た質問でインタビューされた。参加者は、著者がどの程度好感が持てるか、知的か、知識があるか、道徳的か、精神的に整っているか、真実か、そして、参加者がどの程度著者と仕事をしたいと思うか（例：全く知的ではない、やや知的、やや知的、非常に知的）、といったことを尋ねられた。 インタビューの最後には、一連のデモグラフィックな質問が行われた。 11結果と考察 予測を評価するために、研究1で述べたのと同じ一元配置の分散分析、二段階の階層的回帰分析を実施した。親コスタリカ・バイアスは、各被験者の親コスタリカ・ターゲットの平均評価から反コスタリカ・ターゲットの平均評価を差し引くことによって測定された。ANOVA分析の結果、条件に対する主効果は有意であり (F(3, 71) = 3.21, p< .05) 、実験条件間の有意差も認められた (F(2, 71) = 3.53, p< .05) 。 対照条件と各実験条件との計画的比較では、盗難-サリエンス（F(1, 71) = 3.83, p=.05）と社会的孤立-サリエンス（F(1, 71) = 5.48, p<.05） で親コスタリカ・バイアスが著しく増加し、死亡率-サリエンスは対照と有意な差がなかった（F = 0）。さらに比較すると、社会的孤立-サリエンス条件は盗難-サリエンス条件と有意な差はなかったが（F < 1）、孤立-サリエンスと盗難-サリエンスはともに死亡-サリエンスよりも有意に大きな親コスタリカ・バイアスをもたらした（F (1, 71) = 5.80、p< 0.05、F）。 80, p< .05, F(1, 71) = 4.10, p< .05,それぞれ）、TMTの予測とは全く矛盾する結果であった（表3）。 ステップ1では、親コスタリカン・バイアスに対する経験的精神状態、愛国心、権威主義、自尊心、12および人口統計学的変数の主効果を検討した。これまでの分析と同様、人格変数と人口統計学変数は、実験条件の項を含む基本モデルに段階的に入力された。 回帰の第一段階では、自尊心（F(1, 70) = 6.13, p< .05）、13、実験条件（F(3, 70) = 2.95, p< .05）の主効果が見られ、三つの実験条件の間に有意な差があった（F(2, 70) = 3.57, p< .05）。自尊心は親コスタリカ・バイアス（B = -.03, SE = .01, /H9252 = -.31）と負の相関があった。RWA、愛国心、デモグラフィック変数は、これらの効果を媒介しなかった。 重要なことは、窃盗条件と社会的孤立-顕著条件における参加者は、対照と比較して、コスタリカ人へのバイアスが増加したことである（F (1, 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 385 Group Processes & Intergroup Relations 7(4) 38671) = 6.50, p < .01）、また互いに有意差はなかった（F < 1）ことであった。死への不安がイデオロギー防衛を引き起こすというTMTの主張とは逆に、計画比較では、死への顕著性は親コスタリカ・バイアスの増加をもたらさず、盗難への顕著性（F(1, 70) = 5.48, p< .05）、孤立への顕著性（F(1, 70) = 4.45, p< .05）で見られた効果よりも有意に低い効果が得られた。 第2段階回帰では、自尊心と条件との有意な交互作用が認められた（F(4, 67) = 5.75, p< .001）。実験条件間の有意な差は観察されなかった（F = 1）。コスタリカ人バイアスの単純効果を自尊心の平均値で評価した場合、実験条件による効果はわずかに有意であった (F(3, 67) = 2.36,p = .08)。しかし、自尊心が低い（平均より1S.D.低い）ときに評価した単純効果は、条件に対して有意な効果を生じ（F(3, 67) = 3.46, p< .05）、経験精神条件間の有意な差はなかった（F(2, 67) = 1.57, p= .22）。 これらの単純効果は、自尊心が高い場合には小さく、かつ有意ではなかった（F(3, 67) = 1.31, p= .28）。自尊心が低い場合の各実験条件と対照条件の単純効果を調べる計画比較では、社会的等価性と窃盗-サリエンス条件では親コスタリカ・バイアスが有意に増加した。しかし、死亡率顕著条件では、自尊心が低い場合でも、集団間バイアスを増加させることはできなかった。図3は、自尊心が高いときと低いときの実験条件による単純効果である。実験条件間の有意差は認められなかった（F(2, 67) = 2.01, p= .14）。 グループ間イデオロギーバイアスに対する自尊心のモデレーティング効果は、我々の理論的視点の核心部分と一致する。もし、グローバルな自尊心が自分の健康状態の見通しを示すものであり、自分が健康上の課題にどの程度対応できるかを示すものであるとすれば（一部は、社会的統合の程度によって決まる）、そしてもし、社会的支援を得るために集団イデオロギーバイアスが増大するならば、脅威の時代に、自尊心の低い人は支援を得るために集団間バイアスが増大し、自尊心の高い人はそうした宣伝をしなくても良い、ということになる。 自尊心が果たす役割に関する我々の解釈は、望ましい内集団の周辺にいる人々は、内集団の中核にいる人々よりも内集団の理想に大きな愛着を示し、外集団の軽蔑をより多く表明するという一連の文献と一致する（レビューについてはHewstone, Rubin, & Willis, 2002を参照のこと）。例えば、中東のユダヤ人は身体的にはアラブ人に似ているが、ヨーロッパのユダヤ人に比べてアラブ人に対する強い敵意と偏見を報告する。ユダヤ人社会の比較的周辺的で地位の低い中東系ユダヤ人は、地位の高いユダヤ人社会の中心的なメンバーに受け入れられるために、アラブ人への蔑視を利用することがある（Peres, 1971）。表3.条件別親コスタリカ・バイアスの平均値と標準偏差（研究3） 実験条件 親コスタリカ人死亡率 盗難 社会的孤立バイアス 制御的サリエンス サリエンス 平均値.69 .67 1.19 1.33 SD.81 .78 .82 .76 N21 22 18 14 注：親コスタリカ人バイアス得点は-0.83から3までで、得点が高いほど、より親コスタリカ人バイアスが強いことを意味する。 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 386 Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 387Whites (Katz, Wackenhut, & Hass, 1986). Noel, Wann, and Branscombe (1995) は、イングループの周辺に位置する人々が、特にイングループの聴衆が予想されるときに、比較対象のアウトグループに対して否定的な判断を示すという実験結果を発表している。著者らは、イングループバイアス、特にアウトグループ蔑視は、望ましい集団における不安定な地位を高めることを可能にする印象管理機能を果たすことができると論じている。 Vohs and Heatherton（2001）は、自尊心の低い人は対人拒否のリスクを認識しやすく、自分の向社会的資質を過小評価しやすいという証拠を検討した後、自尊心の低い人はエゴの脅威を前にすると、仲間に好かれるように行動を修正し、その変化は自己が他者と相互依存しているという知覚を介することを実証している。したがって、自然発生的な集団でも人工的に作られた集団でも、自分の地位が弱いと思われる人は、イングループ規範への適合を宣伝するために努力し、アウトグループのメンバーを軽蔑し、その他の方法で自己呈示を調整し、関連する他者に自分の魅力を高めるのである。社会的受容と規範の遵守が自尊心に与える影響に関する知見（Kirkpatrick & Ellis, 2001; Leary, Cottrell, & Phillips, 2001）と合わせると、これらの結果は自尊心と脅威プライムへの反応との間の相互作用を、死に関係しないプライムを含めて重要視する我々の解釈にとって信頼できるものである。 権威主義権威主義と条件との有意な交互作用は観察されなかった。権威主義が集団間偏向に影響を及ぼさないというのは、一見不可解である。 しかし、コスタリカ人に対する評価の勾配をグラフ化したところ、これは権威主義が高い参加者のグループ間バイアスの天井効果によるものであることが明らかになった。実験条件における低い権威主義者は、コントロールの低い権威主義者よりも大きな集団偏向を示すように見えたが、実験的な高い権威主義者は低い (-1 S.D.)High (+1 S.D.) Self-esteem Mortality Theft Isolation Pro-Costa Rican Bias /K2Ap < .05 /K2A/K2A p < .01 /K2A/K2A N.S. /K2A/K2A/K2A。 N.S. 1.5 1.0 0.5 0.0 -.5 図3.自尊心と実験条件の関数としてのプロコスタリカン・バイアスの標準化単純効果。図3.自尊心と実験条件の関数としてのプロコスタリカン・バイアスの標準化単純効果 P値は、コントロールに対する計画的な比較を反映している。 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 387 Group Processes & Intergroup Relations 7(4) 388は、コントロール高値が測定器上で親コスタリカ・バイアスの最大レベルに達していたため、コントロール高値よりも大きいバイアスを示さなかった。この観察を確認するために、RWAの平均値から1標準偏差下および上における実験条件について、単純効果分析を実施した。RWAが高い場合の単純効果は有意ではなかったが、RWAが低い場合の単純効果は有意な結果をもたらした（F(3, 67) = 5.62, p< .001）。 UCLAのサンプルではなく、コスタリカのサンプルでこの問題が発生したのは、文化的に異なる2つのグループのベースラインの違いに起因すると考えられる。記述統計によると、UCLAのサンプルと比較して、コスタリカのサンプルには本当に低いオーソリティは存在しなかった。コスタリカの参加者は、農村部で大学教育を受けていないため、RWAスケールの上半分を使用し、UCLAの参加者は、リベラルで社会科学を専攻しているため、スケールの下半分を使用しました。UCLA の参加者の平均回答は 3.6（Min: 1.1, Max: 6.4, S.D. = 1）で、これは「そう思わない」と「ややそう思わない」の間の値であった。マニトバ大学のカナダ人大学生の平均値は、常に「どちらでもない」の中間値（約4.7）であった（Altemeyer, 1996）。一方、コスタリカの農村部の参加者の平均は、1～4の尺度で3.1（最小：1.9、最大：4、S.D.=0.48）であり、これは「やや賛成」をわずかに上回る値に相当する。 なぜなら、コスタリカの低権威主義者は、我々のサンプルの他の農村コスタリカ人に対してのみ低権威主義者であるが、スケール上ではほぼ平均レベル、UCLAのサンプルと比べると中・高レベルの権威主義を示すからである。このように考えると、研究3の結果は、ほぼ同レベルの権威主義を示す参加者が、回避的思考誘導後にグループ間バイアスを同様に増加させたという点で研究1と一致する。研究4 研究3では、北米の大学以外の場所で、死に関連しない回避的思考プリムの効果を再現し、グループ間思想バイアスを生じさせた。特に、社会的孤立感が死亡感よりも大きなイデオロギー防衛効果をもたらすという結果は興味深いものであった。我々は、社会的関係の概念化と重要性における文化的差異が、これらの差異の原因である可能性を推測した。 コスタリカ人は相互のつながりを重視し、個人の成功は他者との関係に依存すると考えているので、完全な社会的孤立という概念は、個人主義志向の強いUCLAの学部生が評価するよりも悲惨な体力的課題として内的に評価されるかもしれない。したがって、このような状況下で関連する集団メンバーと必要な絆を形成する動機は、他者への依存を感じている人にとっては、そうでない人よりも、体力向上の課題を達成するために重要である可能性がある。もしこの考え方が正しければ、一つの文化の中で、相互依存の重要性の自己評価が異なる個人は、フィットネスの脅威に対して異なる反応を示すはずである。なぜなら、人生の課題を満たすために他人への依存度が高いと自己評価する人は、社会的支援を得るために、より強い親グループの信号を発するはずだからである。 我々の連合心理学の理論における相互依存の重要性を考慮し、我々は4番目の研究を計画し、アロセントリズムの性格次元と脅威に対する集団間バイアスの変化との関係を探った。我々は、回避的思考誘導への曝露の関数として、アロセントリズムが親コスタリカ・バイアスを正に予測すると予測した。そのため、実験群との相互作用は、対照群と比較して、集団間バイアスを正に予測することが予想され、主効果はすべて、同心円主義のスコアが高い参加者によって引き起こされることが予想された。 方法 参加者参加者は、コスタリカの農村部と都市部の市民（女性53名、男性33名、年齢は06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 388 Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 389from 15 to 65; Mean Age = 30.4) であった。都市に住む人々は、一般に集団主義的な特徴をあまり示さないと考えられているため（Triandis, 1993）、同胞中心主義の得点が正規分布となるようなサンプルを獲得しようと、前述のコスタリカの農村地域から集めたサンプルに加え、コスタリカ中央バレーにある主要都市の郊外で、本研究の参加者の1/3を募集しました。参加者の約3分の2は研究3で述べた2つの農村地域から集められ、残りの3分の1はコスタリカ中部の首都サンホセ（人口250万人）から集められました。募集方法は研究3と同じである。参加者の識字レベルには大きなばらつきがあったため（教育：0～16年、中央値＝8.0）、調査は研究3で述べた構造化面接形式で行われた。インタビューはすべて筆者が非公式にスペイン語で行った。 手順インタビューは、アロケントリズムの個人差を評価するための性格尺度であるESTCOL (Realo et al., 1997)のスペイン語訳を要約して行うことから始まった。この尺度は3つの下位尺度（家族中心主義、地域中心主義、愛国主義）を持ち、すべての項目は集団主義的な言語スタイルと一致すると考えられている三人称時制で表現された。各項目を読み上げた後、参加者は研究3で述べた4段階の強制選択尺度を用いて同意/不同意レベルを尋ねられた。参加者に形式を理解してもらうため、まず2つの練習問題が実施された。 参加者は、3つの条件のいずれかに割り付けられた。死亡率-サリエンス、社会的孤立-サリエンス、コントロールである。実験操作は研究3で説明したものと同じであった。その他の手順は、研究3で説明したものと同じであった。 結果および考察 予測を評価するために、研究1および3で説明したのと同様の一元配置分散分析および階層型回帰分析を実施した。ANOVAでは、条件によって有意な主効果が見られた(F(2, 83) = 3.32, p< .05)。予想通り、社会的孤立を考えるように言われた参加者は、対照群の参加者よりも大きな集団間バイアスを示した (F(1, 83) = 4.31, p< .05)。研究3の場合と同様に、死亡率-サリアンスは親コスタリカ・バイアスの増加にはつながらず（F< 1）、社会的孤立よりも有意に低かった（F(1, 83) = 5.46, p< .05）(表4)。 回帰の第一段階では、年齢、15歳（F(1, 82) = 3.94, p< .05）、条件（F(2, 82) = 3.19, p<.05）に有意な主効果があり、実験条件間で有意な差があった（F(1, 82) = 4.81, p<.05）．年齢による影響を制御した回帰分析の結果、孤立-サリエンスは対照と比較して親コスタリカ的バイアスの有意な増加をもたらしたが（B = .46, SE= .22, p< .05, /H9252= .47）、死亡-サリエンスはそうではなかった（F< 1）。研究3と同様に、社会的孤立の熟考は、死の熟考よりも親コスタリカ的バイアスにつながった (F(1, 82) = 4.81, p< .05).また、社会的孤立の熟考は、死の熟考よりも、親コスタリカ的バイアスにつながった。 予測したように、第2段階は、同心円と条件との有意な相互作用を明らかにした（F(3, 79) = 2.93, p< 0.05）。実験条件の関数として親コスタリカ・バイアスの増加を測定するスロープは、コントロールと有意に異なり（F(2, 80) = 4.89, p< .01）、実験条件間ではわずかな差（F(1, 80) = 3.53, p= .06）であった。年齢は依然として有意であった（F(1, 79) = 4.07, p< .05）。表4.条件別親コスタリカ・バイアスの平均値と標準偏差（研究4） 実験条件 親コスタ死亡率 社会的孤立 リカンバイアスコントロールサリエンス平均値 69 .61 1.21 SD.84 1.10 .91 N30 26 30 注：親コスタリカ・バイアス得点は -2.17 から 3 までで、得点が高いほど親コスタリカ・バイアスは大きいことを反映している。 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 389 Group Processes & Intergroup Relations 7(4) 390condition assessed at the mean of allocentrism was signiﬁcant compared to the control (F(2, 79) = 3.63, p< .05).コントロールと比較すると、アロセントリズムは有意であった。計画比較では、社会的同位性-サリエンスの単純効果はコントロールと比較して有意に異なったが (F(1, 79) = 4.68, p< .05) 、死亡率-サリエンスの条件はそうではなかった (F< 1)。 前の解析と同様に、社会的孤立と死の快感の対照をとった。 前の分析と同様に、社会的隔離 vs. 死亡率-サリエンスの対比では、コスタリカ人バイアスは死亡率-サリエンスよりも社会的隔離-サリエンスで有意に大きくなった (F(1, 79) = 5.92, p< .05),。 また、allocentrismの平均値より1S.D.上で計算した単純効果では、実験条件による有意な効果が見られたが、実験条件間の有意な差はなかった（F< 1）。 図4は、各実験条件と対照条件との比較であり、社会的隔離条件と死亡率顕著条件において、アロセントリズムが一定に高い場合、親コスタリカ人バイアスが有意に増加することが明らかになった。平均値より1S.D.下で評価した単純効果では、コスタリカ人へのバイアスが有意に増加した。 で評価したところ、実験条件によって有意な効果が認められた（F((2, 79) = 4.69, p= .01）。死亡率-サリエンスでは、対照と比較して親コスタリカ的バイアスが有意に減少したが、社会的孤立-サリエンスでは減少しなかった（図4）。 これらの結果は研究3の結果を再現するものであり、コスタリカ人参加者に社会的孤立を想起させると集団イデオロギーの防衛が強くなること、しかし死の想起は減速変数がない場合には同じ効果をもたらさないことを明確に示している。しかし、死の熟考は、テロ管理理論が予測するように、親コスタリカ・バイアスを増加させるという主効果を生じなかった。また、完全な社会的孤立を想像することは、それ自体でも、またアロセントリズムの関数としても、親コスタリカ・バイアスを増加させるという我々の事前予測と一致していた。 これらの結果は、一つの社会の成員は、その程度に差があると予想されることから、低（-1標準偏差）高（＋1標準偏差）中心主義死亡率孤立 1.5 1.5という考え方を支持するものである。 0 0.5 0 -.5 親コスタリカ・バイアス /K2A/K2A /K2A N.S /K2A /K2Ap < .05 /K2A/K2A p < .01 図4．親コスタリカ・バイアスの標準化単純効果、同心円主義と実験条件の関数として．記号は、同レベルの対照条件と比較して、同心円の高さおよび低さ（平均値の上下1 S.D.）での実験操作後の親コスタリカ・バイアスの増加/減少を表す。P値は、コントロールに対する計画的な比較を反映している。 社会中心的な価値観を強く内面化した人は、そうでない人に比べて、適合主義を通じて社会的支援を得ようとする試みが顕著に反応的になるはずである。 最も重要なことは、研究1および3の主要な結果を再現したことである。すなわち、死の思考を引き起こすテーマに限らず、嫌悪的なテーマを熟考する参加者にも、グループ間バイアスをもたらす社会的評価の変化が見出されたことである。 総論 研究1では、参加者に死を想起させることなく、内集団イデオロギーバイアスの増加が誘発されることを示した。 TMT提唱者が主張する死の特異的優位性とは異なり、イングループバイアスの増大は、a)人間が進化した環境では有害な身体的影響を及ぼし、b)味方の支援を用いて最も効果的に対処できたであろう一連の状況を想起させることに由来すると考える。実験効果は、権威主義、恐怖、抑うつの個人差によって調整された。研究2では、TMT研究でよく用いられる測定法を用いて、自分の死に想いを馳せる参加者と異なり、死に関連しない嫌悪的テーマを想起する参加者は、死への思考アクセス性の増加を示さないことを実証した。したがって、強盗や孤立を考えることが死の想起という観点から説明できない認知結果であることがわかった。研究3および4では、研究1の内容を再現するとともに、コスタリカの2サンプルにおいて、権威主義、自尊心、同種中心主義が集団間偏向に及ぼす調整効果を検討した。 これらの結果は、「死生観効果」が死の思考に特有なものではないことを示す証拠を拡大するものである。これらの結果は、北米の大学環境とは全く異なる文化的背景で得られたものであり、汎人類の心理メカニズムおよびそれらが異なる文化的背景でどのように作用するかについて予測する上で、我々の理論の強さを物語るものであり、その証拠能力は強化されている。 我々は、集団間バイアスの誘発要因として、様々な回避的思考プリムの有効性に文化的差異がある証拠を見いだした。UCLAの学部生では、死生観は社会的孤立や盗難観よりも大きな集団間バイアスの増大をもたらしたが、その差は有意ではなかった。 一方、コスタリカ人参加者では、社会的孤立が死生観よりも大きな集団間バイアスを一貫してもたらした16。 これらのパターンは、適応的課題に対する特定の解決策が文化的にどの程度まで練り上げられたかという文化間の真の差異を反映しているものと思われる。 どの社会でも見られる機能的、関係的欲求の異なる側面が異なる文化で過認識され（Levy, 1973）、ある社会で特定のシナリオが著しく忌避される原因になっている可能性がある。一方、宗教的信念や宿命論的な態度（Triandis, 1995）の社会では、死の恐怖は、世俗的な生活、長寿、運命のコントロールを重視する複雑な工業化国家に住む人々ほど、致命的なテーマを避けることは問題ではないかもしれない。 文化的多様性と連合心理学の関係を探るには、ここで紹介したサンプル数よりも多いサンプル数での異文化間研究が必要であることは明らかである。今のところ、ある社会では、完全に社会的に孤立する可能性が、意味を求める人間の多くの努力の根源にあると言われる死の恐怖よりも深い不安を引き起こすかもしれないという考え方に、我々は前向きである。 我々の結果は、参加者に死を想起させることなく、適性に関連するプライムを用いて、いわゆる死へのサリアンス効果のあるインターグループNavarrete et al.anxiety and intergroup bias 391 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 391 Group Processes & Intergroup Relations 7(4) 392biasが生成できることを示す有力な証拠である。これらの効果は、テロマネジメント研究で発見されたのと同じ個人の性格や思想的志向の違い（権威主義、自尊心）、そして我々が探索した新しいモデレーター（アロセントリズム）によって調整される。これらのパターンを総合すると、人間は、祖先の条件下では生物学的適性が脅かされるような状況に対する反応を形成する心理的メカニズムを持っているという我々の主張が裏付けられる。このような心理的メカニズムは、自分が属する集団の文化によって形成されたアウトプットを生み出し、集団の支持を受ける可能性を高める必要性によって行動を調整する。 私たちは種として、行動基準の共有と無関係な個人間の広範な協力に基本的に依存している点でユニークである(Boyd & Richerson, 1985)。実際、最近のテロ対策研究では、集団の識別と密接な社会的関係が、集団間偏見とイデオロギー防衛の調査における重要なテーマであることが報告されている（例えば、Mikulincer et al.、2002）。人間の心理と文化における死の中心性については断固として主張するが、テロマネジメントの提唱者は、「まだ特定されていない不快な出来事のカテゴリーが、我々の死亡率顕著性研究の結果を招いた真犯人である可能性もある」（Greenberg et al.、1994）と認めている。ここで我々は、そのような結果をもたらす逆行現象のカテゴリーが、社会的支援の必要性に関連する個人的脅威を含むものであることを仮定し、証拠を見出した。我々は、ここで提示された連合心理学の理論は、テロマネジメント研究者によって印象的に記録された不安と集団間偏向の現象について説得力があり首尾一貫した説明を提供し、さらに検証可能な予測を生み出す可能性が高いものであると確信している。予備的な多変量回帰では、どの人口統計学的変数についても条件間の差は見られなかった。 2.テロマネジメント研究者に従い、各被験者の親米標的の平均評価から反米標的の平均評価を差し引くことで、親米バイアスの変数を作成した。 3. 読者は、権威主義が親米バイアスと有意な相関を示さなかったことを不思議に思うかもしれない。しかし、事後分析では、権威主義は従属変数と正の相関があったが、愛国心がモデルに追加された後は、モデルによって説明される固有の分散にもはや寄与しないことが明らかになった。 4. 愛国心について評価したどの人口統計学的指標にも、有意な交互作用効果はなかった。しかし、愛国心に関する有意な主効果は維持された。ここで述べたRWA/H11003条件交互作用は、愛国心の効果を制御している。このことは、交互作用が、参加者のイングループへの忠誠心によって生じているのではなく、権威主義の低／高というイデオロギーによって生じていることを示唆している。Duckitt, Wagner, du Plessis, and Birum (2002)は、権威主義の定義を狭めて、社会規範からの逸脱を許容する程度を記述すべきであると主張する。もしそうであれば、連合心理がプライムされた後、低権威主義者はイデオロギーの異質性をより許容し、高権威主義者はより許容しないことが交互作用を引き起こすことになる。これにより、低位者の集団間バイアスは小さくなり、高位者からの集団間バイアスは大きくなる。 5.高権威主義者と低権威主義者の実験条件による親アメリカン・バイアスの効果量の検討から、社会的孤立-サリエンス条件と権威主義で観察された「拮抗的」相互作用が、コントロールと比較してこの条件の主効果がない原因である可能性が示唆された。高位の権威主義者は親米的バイアスを増加させ、低位の権威主義者は対照と比較して親米的バイアスを減少させ、その結果、主効果が得られないようである。 6. Instituto Nacional de Estadística y Censos 2001. IX Censo Nacional de Población y de Vivienda del 2000: Instituto Nacional de Estadística.Census statistics available at http://www.inec.go.cr/INEC2. 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 392 Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 3937.多くのヒスパニック系の著者は、不安とグループ間バイアスの存在を指摘している。多くのヒスパニック系の著者は、多くのラテンアメリカの文化では、死の恐怖が北欧のように抑圧されるのではなく、オープンに表現されやすいと指摘している（e.g…. Delibes, 1966; Fierro, 1980）。死のテーマは何世紀にもわたってヒスパニック文学の定番であり、コロンブス以前のルーツである可能性もある（Siefken, 1993）。 8. 均質化とは、近代的でリベラルな大学教育が態度や価値観に与える影響を意味する。Haidt, Koller, and Dias (1993)は、少なくともいくつかの領域において、文化圏を越えて、大学の学生は、大学の壁の外に住む同胞に似ているよりも、社会的態度において互いに似ていることを示している。 9. 人口統計学的変数の多変量回帰では、年齢、教育、性比に条件間の有意な差は見られなかった。 10. 研究 1 の RWA データを主成分分析し、オリジナル尺度から 8 項目を選択した。本研究では、トップローディング項目（固有値 4.0 以上）のみを使用した。 11. Rosenberg Self Esteem Scale を除くすべての尺度は、筆者と Priscilla Estrada Leon によってコスタリカのスペイン語に翻訳された。本研究で使用した正確なスペイン語の尺度は、希望により入手可能である。 12. 権威主義と自尊心の分布が左肩下がりになっているため、分析前にこれらの変数のべき乗変換を行った。 13. 分析の主要な独立指標に影響がないことを確認するため、多変量回帰に自尊心のスコアを追加し、操作が参加者の自尊心に影響を与えた可能性を検討した。その結果、自尊心を独立変数として使用することが正当化された。 14. この実験は、相互関連性と集団間バイアスの概念を扱うために特別にデザインされたものであるため、回避的思考条件として死亡率および社会的孤立-サリエンス処理のみを用い、盗難-サリエンス条件は含まなかった。 15. 年齢は、親コスタリカ・バイアス（B = .02, S.E. = .01, ?= .22）と正の相関があり、第2段階でも有意なままであった。 16. コスタリカでの2つのパイロット研究では、実験条件間で同様の結果が得られた。これらのパイロット研究のデータは、要望に応じて入手可能である。 17. テロマネジメント研究者と同様に、我々は世界観と個人の対処戦略の重要性を強調しているので、本当に適切な分析は、個人差の関連する側面をとらえるモデレータのレベルが高い場合と低い場合のコントロールに対する各実験条件の効果を比較するものだと主張する人もいるかもしれない。したがって、最も適切な比較は、研究1では高権威者、研究4では低自尊心、研究4では高配偶者について行われたものである。もしこれらが本当に最も重要な比較であるならば、死亡率-サリアンスが集団間偏向を増加させないのは、コスタリカの2つの研究のうち1つだけ（研究3では自尊心が低い参加者）であり、我々が主張するようにコスタリカの両方の研究においてではない、ということになる。しかし、同じ基準で分析すると、研究1では高権威者、研究3では低自尊心者、研究4では高配偶者というように、それぞれの実験において社会的孤立と窃盗-サリエンスが集団間偏向を有意に増加させることが示された。このことは、我々の代替プライムは、研究間で死亡率顕著性よりも一貫して集団間バイアスの増加を予測することを示唆している。 18. 謝辞 この研究は、全米科学財団、UCLA Dissertation Year Fellowship、UCLA人類学部、UCLA Center for Culture, Brain and Development、UCLA Summer Research Mentorship Programからの助成金によって行われたものである。 本稿の初期原稿に有益なコメントをいただいたClark Barrett, Alan Fiske, Martie Haselton, Richard McElreath, and Jim Sidaniusに感謝する。統計的なアドバイスをしてくれたMichael Mitchellに感謝する。また、翻訳を手伝ってくれたPriscila León Estrada、コスタリカでデータ収集をしてくれたBeatríz Roja GarcíaとElizabeth Zuñiga Elizondoに感謝の意を表する。また、コスタリカで後方支援をしてくれたDoña Margarita Quesada Quirózに特別な謝意を表する。最後に，UCLA でのデータ収集とデータ入力に協力してくれた Anna Heilig，Ava Geltmeyer，Anthropology 197 のリサーチ・アシスタントに感謝する．

References 1. Adorno, T. W. E., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. (1950). The authoritarian personality. New York: Harper and Row. 2. Aiken, L., & West, S. (1991).Multiple regression. Newbury Park, CA: Sage. 3. Altemeyer, B. (1996). The authoritarian specter. Cambridge, MA: Harvard University Press. 4. Altemeyer, B. (1998). The other ‘authoritarian personality’. Advances in Experimental Social Psychology, 30, 47–92. 5. Arndt, J., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Simon, L. (1997). Suppression, accessibility of death-related thoughts, and cultural worldview defense: Exploring the psychodynamics of terror management. Journal of Personality and Social Psychology, 73(1), 5–18. 6. Aron, A., Aron, E. N., Tudor, M., & Nelson, G. (1991). Close relationships as including other in the self. Journal of Personality and Social Psychology, 60(2), 241–253. 7. Asch, S. E. (1952). Social psychology. New York: Prentice. 8. Asch, S. E. (1955). Opinions and social pressure. Scientiﬁc American, 193(5), 31–35. 9. Avendano Sandoval, R., & Dias Guerrero, R. (1992). Estudio experimental de la abnegación. Revista Mexicana de Psicología, 9, 15–19. 10. Baldwin, M. W. (1992). Relational schemas and the processing of social information. Psychological Bulletin, 112(3), 461–484. 11. Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. Psychological Bulletin, 117(3), 497–529. 12. Becker, E. (1962).The birth and death of meaning. New York: Free Press. 13. Becker, E. (1973). The denial of death. New York: Free Press. 14. Beisanz, M. H., Biesanz, R., & Biesanz, K. (1999). The Ticos: Culture and social change in Costa Rica. London: Lynne Rienner. 15. Bernard, R. H. (1995). Research methods in anthropology: Qualitative and quantitative approaches (2nd edn). London: Sage. 16. Boyd, R., & Richerson, P. J. (1985). Culture and the evolutionary process. Chicago: University of Chicago Press. 17. Boyd, R., & Richerson, P. J. (1992). Punishment allows the evolution of cooperation (or anything else) in sizable groups. Ethology and Sociobiology, 13(3), 171–195. 18. Buss, D. M. (1991). Evolutionary personality psychology. Annual Review of Psychology, 42, 459–491. 19. Buss, D. M. (1997). Human social motivation in evolutionary perspective: Grounding terror management theory. Psychological Inquiry, 8(1), 22–26.Byrne, D. (1971).The attraction paradigm. San Diego, CA: Academic Press. 20. Cosmides, L., & Tooby, J. (2002). Unraveling the enigma of human intelligence: Evolutionary psychology and the multimodular mind. In R. J. 21. Sternberg & J. C. Kaufman (Eds.), The evolution of intelligence(pp. 145–198). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. 22. Curtis, V. A. & Biran, A. (2001). Dirt, disgust and disease: Is hygiene in our genes? Perspectives in Biology and Medicine, 44(1), 17–31. 23. Damasio, A. R. (1994). Descartes’ error: Emotion, reason and the human brain. New York: Grosset/Putnam. 24. Delibes, M. (1966). USA y yo. Barcelona: Ediciones Destino. 25. Duckitt, J., Wagner, C., du Plessis, I., & Birum, I. (2002). The psychological bases of ideology and prejudice: Testing a dual process model. Journal of Personality and Social Psychology, 83(1), 75–93. 26. Fessler, D. M. T. (2001). Emotions and cost/beneﬁt assessment: The role of shame and self-esteem in risk taking. In R. Selten & G. Gigerenzer (Eds.), Bounded Rationality: The Adaptive Toolbox (pp. 191–214). Cambridge, MA: MIT University Press. 27. Festinger, L. (1957). A theory of cognitive dissonance. Evanston, IL: Row & Peterson. 28. Fierro, A. (1980). A note on death and dying. Hispanic Journal of Behavioral Sciences, 2(4), 401–406. 29. Fishbein, M., Triandis, H. C., Kanfer, F. H., Becker, M., Middlestadt, S. E., Eichler, A., et al. (2001). Part I. Basic processes. In A. Baum & T. A. Revenson (Eds.), Handbook of health psychology (pp. 3–318). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. Fiske, A. (2002). Socio-moral emotions motivate action to sustain social relationships. Self and Identity, 1, 169–175. Fiske, A.P., Kitayama, S., Markus, H., & Nisbett, D. (1997). The cultural matrix of social psychology. In Gilber, S. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), Handbook of Social Psychology (4th edn) (pp. 915–981). New York: McGraw Hill. Frank, R. H. (2001). Cooperation through emotional commitment. In R. M. Nesse (Ed.), Evolution and the capacity for commitment (pp. 57–76). New York: Russell Sage Foundation. Freud, S. (1984). Civilization and its discontents. New York: Norton. (Original published 1929). Gibson, E. J., & R. D. Walk (1960). ‘The “visual cliff”.’ Scientiﬁc American, 202(4): 64–71 Greenberg, J., Arndt, J., Schimel, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (2001). Clarifying the function of mortality salience-induced worldview defense:Group Processes & Intergroup Relations 7(4) 394 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 394 Renewed suppression or reduced accessibility of death-related thoughts? Journal of Experimental Social Psychology, 37(1), 70–76. Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), Public and private self (pp. 189–212). New York: Springer-Verlag. Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Veeder, M., Kirklands, S., & et al.  (1990). Evidence for terror management theory II: The effects of mortality salience on reactions to those who threaten or bolster the cultural worldview. Journal of Personality and Social Psychology, 58(2), 308–318. Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Simon, L., & Breus, M. (1994). Role of consciousness and accessibility of death-related thoughts in mortality salience effects. Journal of Personality and Social Psychology, 67(4), 627–637. Greenberg, J., Simon, L., Pyszczynski, T., Solomon, S., & Chatel, D. (1992). Terror management and tolerance: Does mortality salience always intensify negative reactions to others who threaten one’s worldview? Journal of Personality and Social Psychology, 63(2), 212–220. Greenberg, J., Simon, L., Harmon-Jones, E., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Lyon, D. (1995). Testing alternative explanations for mortality salience effects: Terror management, value accessibility, or worrisome thoughts? European Journal of Social Psychology, 12(4), 417–433. Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual reﬁnements. Advances in Experimental Social Psychology, 29, 61–139. Greenberg, J., Schimel, J., Martens, A., Solomon, S., & Pyszcznyski, T. (2001). Sympathy for the devil: Evidence that reminding Whites of their mortality promotes more favorable reactions to White racists. Motivation and Emotion, 25(2), 113–133. Haidt, J., Koller, S. H., & Dias, M. G. (1993). Affect, culture, and morality, or is it wrong to eat your dog? Journal of Personality and Social Psychology, 65(4), 613–628. Hallowell, A. I. (1956). The structural and functional dimensions of a human existence. Quarterly Review of Biology, 31, 88–101. Hallowell, A. I. (1963). Personality, culture and society in behavioral evolution. In R. D. Fogelson et al. (Eds.), Contributions to anthropology: Selected papers of A. I. Hallowell. Chicago: University of Chicago Press.Hamilton, L. C. (1998). Statistics with Stata 5. Paciﬁc Grove, CA: Brooks/Cole. Hardin, C. D., & Conley, T. D. (2001). A relational approach to cognition: Shared experience and relationship afﬁrmation in social cognition. In G. B. Moskowitz (Ed.), Cognitive social psychology: The Princeton Symposium on the Legacy and Future of Social Cognition(pp. 3–17). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. Hardin, C. D., & Higgins, E. T. (1996). Shared reality: How social veriﬁcation makes the subjective objective. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), Handbook of motivation and cognition, Vol. 3: The interpersonal context. Handbook of motivation and cognition(pp. 28–84). New York: Guilford Press. Harmon-Jones, E., Greenberg, J., Solomon, S., & Simon, L. (1996). The effects of mortality salience on intergroup bias between minimal groups. European Journal of Social Psychology, 26(4), 677–681. Harmon-Jones, E., Simon, L., Greenberg, J., Pyszczynski, T., & et al. (1997). Terror management theory and self-esteem: Evidence that increased self-esteem reduced mortality salience effects. Journal of Personality and Social Psychology, 72(1), 24–36. Hewstone, M., Rubin, M., & Willis, H. (2002). Intergroup bias. Annual Review of Psychology, 53, 575–604. Hofstede, G. (1991). Culture and organizations. London: McGraw-Hill. Jones, C. L. (1935). Costa Rica and civilization in the Caribbean. Madison, WI: University of Wisconsin Press. Katz, I., Wackenhut, J., & Hass, R. G. (1986). Racial ambivalence, value duality, and behavior. In J. F. Dovidio & L. Gaertner (Eds.), Prejudice, discrimination, and racism(pp. 35–60). Orlando, FL: Academic Press. Kierkegaard, S. (1959). The Concept of dread. Princeton, NJ: Princeton University Press. (Original work published in 1844). Kirkpatrick, L. A., & Ellis, B. J. (2001). Evolutionary perspectives on self-evaluation and self-esteem. In G. Fletcher & M. Clark (Eds.), The Blackwell handbook of social psychology: Vol. 2: Interpersonal processes. Oxford, UK: Blackwell. Kirkpatrick, L. A., Waugh, C. E., Valencia, A., & Webster, G. D. (2002). The functional domain speciﬁcity of self-esteem and the differential prediction of aggression. Journal of Personality and Social Psychology, 82(5), 756–767. Leary, M. R. (2000). Affect, cognition, and the social emotions. In J. P. Forgas (Ed.), Feeling andNavarrete et al.anxiety and intergroup bias 395 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 395 Group Processes & Intergroup Relations 7(4) 396thinking: The role of affect in social cognition. Studies in emotion and social interaction, second series (pp. 331–356). New York: Cambridge University Press. Leary, M. R., Cottrell, C. A., & Phillips, M. (2001). Deconfounding the effects of dominance and social acceptance on self-esteem. Journal of Personality and Social Psychology, 81(5), 898–909. Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. Journal of Personality and Social Psychology, 68(3), 518–530. Leary, M. R., & Schreindorfer, L. S. (1997). Unresolved issues with terror management theory. Psychological Inquiry, 8(1), 26–29. Lerner, M. (1980). The belief in a just world: Afundamental delusion. New York: Plenum. Levy, R. I. (1973). Tahitians: Mind and experience in the Society Islands.Chicago: University of Chicago Press. Manson, J. H., & Wrangham, R. W. (1991). Intergroup aggression in chimpanzees and humans. Current Anthropology, 32(4), 369–390. MacCallum, R. C., Zhang, S., Preacher, K. J., & Rucker, D. D. (2002). On the practice of dichotomization of quantitative variables. Psychological Methods, 7(1), 19–40. McElreath, R., Boyd, R., & Richerson, P. (2003). Shared norms can lead to the evolution of ethnic markers. Current Anthropology, 44(1), 122–129. McGregor, H. A., Lieberman, J. D., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., Simon, L., & Pyszczynski, T. (1998). Terror management and aggression: Evidence that mortality salience motivates aggression against worldview-threatening others. Journal of Personality and Social Psychology, 74(3), 590–605. Meléndez, C. (1991). Historia de Costa Rica. San Jose, Costa Rica: EUNED. Mikulincer, M., Florian, V., Birnbaum, G., & Malishkevich. S. (2002). The death-anxiety buffering function of close relationships: Exploring the effects of separation reminders on death-thought accessibility. Personality and Social Psychology Bulletin, 28(3), 287–299. Noel, G., Wann, D. L., & Branscombe, N. R. (1995). Peripheral ingroup membership status and public negativity towards outgroups. Journal of Personality and Social Psychology, 68(1), 127–137. Oyserman, D., Coon, H. M., & Kemmelmeier, M. (2002). Rethinking individualism and collectivism: Evaluation of theoretical assumptions and meta-analyses. Psychological Bulletin, 128(1), 3–72. Paulhus, D. L., & Trapnell, P. D. (1997). Terrormanagement theory: Extended or overextended? Psychological Inquiry, 8(1), 40–43. Pelham, B. W. (1997). Human motivation has multiple roots. Psychological Inquiry, 8(1), 44–47. Peres, Y. (1971). Ethnic relations in Israel. American Journal of Sociology, 76, 1021–1047. Pinker, S. (1997). How the mind works.New York: W.W. Norton. Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. (1994). Social dominance orientation: Apersonality variable predicting social and political attitudes.Journal of Personality and Social Psychology, 67(4), 741–763. Rank, O. (1936). Will therapy and truth and reality. New York: Knopf. Realo, A., Allik, J., & Vadi, M. (1997). The hierarchical structure of collectivism. Journal of Research in Personality, 31(1), 93–116. Rosenberg, M. (1965). Society and adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press. Schaller, M., & Conway, L. G., III (1999). Inﬂuence of impression-management goals on the emerging contents of group stereotypes: Support for a social-evolutionary process. Personality and Social Psychology Bulletin, 25(7), 819–833. Sherif, M. (1966). The psychology of social norms. Oxford, UK: Harper Torchbooks. Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, R. W., & Sherif, C. (1954). Intergroup conﬂict and cooperation: The robbers cave experiment. Norman, OK: University of Oklahoma (University book exchange available at: http://psychclassics.yorku.ca/Sherif). Siefken, S. (1993). The Hispanic perspective on death and dying: A combination of respect, empathy, and spirituality. Pride Institute Journal of Long Term Home Health Care, 12(2), 26–28. Spiro, M. E. (1961). Social systems, personality, and functional analysis.,In B. Kaplan (Ed.), Studying personality cross-culturally. New York: Harper and Row. Suh, E., Diener, E., Oishi, S., & Triandis, H. C. (1998). The shifting basis of life satisfaction judgments across cultures: Emotions versus norms. Journal of Personality and Social Psychology, 74(2), 482–493. Symons, D. (1992). On the use and misuse of Darwinism in the study of human behavior. In J. H. Barkow, L. Cosmides, & J. Tooby (Eds.), The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture(pp. 137–159). New York: Oxford University Press. Tooby, J., & Cosmides, L. (1992). The psychological foundations of culture. In J. H. Barkow, L. Cosmides & J. Tooby (Eds.), The adapted mind: 06 046144 3/9/04 3:33 pm Page 396 Navarrete et al.anxiety and intergroup bias 397Evolutionary psychology and the generation of culture (pp. 19–136). New York: Oxford University Press. Tooby, J., & Cosmides, L. (1996). Friendship and the banker’s paradox: Other pathways to the evolution of adaptations for altruism. In W. G. Runciman & J. M. Smith (Eds.), Evolution of social behaviour patterns in primates and man. Proceedings of The British Academy, Vol. 88(pp. 119–143). Oxford: Oxford University Press/British Academy. Triandis, H. C. (1972). The analysis of subjective culture. New York: Wiley. Triandis, H. C. (1993). Collectivism and individualism as cultural syndromes. Cross-Cultural Research: The Journal of Comparative Social Science, 27(3–4), 155–180. Triandis, H. (1995). Individualism and collectivism. Boulder, CO: Westview. Triandis, H. C., Leung, K., Villareal, M. J., & Clack, F. L. (1985). Allocentric versus idiocentric tendencies: Convergent and discriminant validation. Journal of Research in Personality, 19(4), 395–415. Triandis, H. C., Marin, G., Lisansky, J., & Betancourt, H. (1984). Simpatia as a cultural script of Hispanics. Journal of Personality and Social Psychology, 47(6), 1363–1375. Triandis, H. C., & Traﬁmow, D. (2001). Cross-national prevalence of collectivism. In C. Sedikides & M. B. Brewer (Eds.), Individual self, relational self, collective self(pp. 259–276). Philadelphia, PA: Psychology Press. Vohs, K. D., & T. F. Heatherton. (2001). Self-esteem and threats to self: Implications for self-construals and interpersonal perceptions. Journal of Personality and Social Psychology, 81(6), 1103–1118. Watson, D., & Clark, L. A. (1992). Affects separable and inseparable: On the hierarchical arrangement of the negative affects. Journal of Personality and Social Psychology, 62(3), 489–505.